

サンワチャンネル

令和7年1・2月号

明けましておめでとうございます。

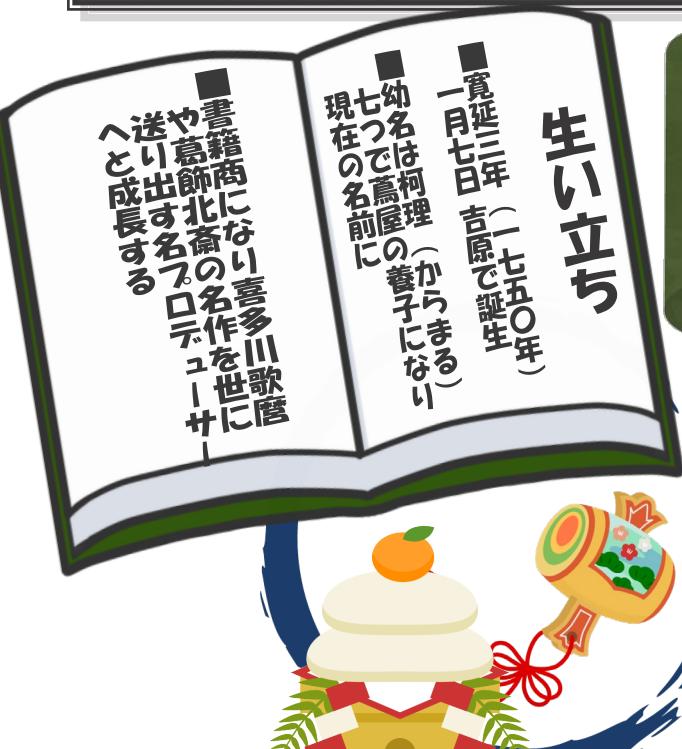
旧年中は格別なご高配を賜り、まことにありがとうございます。職員一同心よりお願い申し上げます。

本年も、より一層のご支援を賜りますよう、職員一同心よりお願い申し上げます。

2025年(令和7年)大河ドラマ

「べらぼう～葛重栄華の夢囀～」

時は江戸時代、茶屋と貸本屋を営んでいた葛屋重三郎(つたやじゅうざぶろう)がこの物語の主人公です。客足が遠のきつつある吉原を活気溢れた町に蘇らせるべく版元となり奮闘します。書店経営を通じて人々が求める書物とは何か、プロデューサーの役割を担い、多くの天才絵師たちの才能を開花させ江戸のメディア王と呼ばれるまでが描かれています。



江戸にも存在した
レナルタル業

本の値段が高かった江戸時代、庶民が本に触れるのに最も身近な存在だったのが貸本屋でした。文化5年(1808)の記録では150万人近くが住んでいた江戸には、約650人の貸本屋がいたと言われています。

2つの意味
べらぼうの語源

浮世絵ができるまで

葛重は浮世絵の全盛期を築き上げた人物としても知られており、浮世絵の制作から販売までを統括する重要な役割を担っていました。当時は木版画だったため大きく以下の3分野の職人が必要でした。

- 1 絵師
- 2 彫師
- 3 摺師(すりし)←彫った木版に塗装し、紙に摺りつける

版元は職人との意思疎通を図りつつ作品の企画や販売も行うため、今でいうところの出版社のような立ち位置に属していました。

- ・籠棒(へらぼう)……飯を食うだけの役立たず、穀漬(ごくつぶし)
 - ・便乱坊(べらんぼう)……滑稽な様子で人を笑わす芸人の呼び名、やや馬鹿にしたような意味で使われていた
- 罵る意味で使われていましたが、のちに江戸っ子の間で「桁外れなこと」「常識から外れたこと」という新しい意味で使われるようになり、それが浸透したと言われています。



発行元：税理士法人 三和会計事務所